

第1部会

宗教共同体の哲学的考察

小田 淑子

一 宗教共同体と宗教哲学

宗教哲学が宗教とは何かを哲学的に問う学問であるなら、宗教思想だけではなく、宗教現象や宗教制度もまたその研究対象とすべきである。現在の日本人の多くが初詣や豊稷祈願に参加し、仏教の死者儀礼を行いつつ、自分は無宗教だと表明する。この誤認を宗教学や宗教哲学は放置すべきではない。日常生活の中の宗教も宗教の重要な一面として考察する宗教哲学が必要であろう。宗教共同体の考察は「宗教とは何か」を問う一つの切り口である。本稿では詳しい説明を省くが、宗教共同体とは現代の日本社会や教会制度のないイスラーム社会を意味し、多数派宗教の生活様式が浸透した共同体である。

人が宗教ないし宗教的真理と出会う場合、創唱者を除いて既存の宗教に出会う。ゲルナーは「理性が成熟する以前に、人はすでに文化を学ぶ」(*Reason and Culture*)と指摘したが、宗教も同様で、主体的な宗教体験に先立って、日常生活の中で宗教に触れる。そこで宗教に関する素朴な知を身につける。宗教共同体を形成し世代間伝承されること、および儀礼をもつことが宗教と哲学との決定的な相違である。それは宗教的真理(神、来世、救済)の特異性と関連するだろう。この特徴は教義思想をもたない古代宗教にも、教義・神学の伝統をもつ宗教

にも共通する。それゆえ、宗教とは何かという問いをあらゆる宗教に妥当する形で問うことができる。

二 宗教共同体と宗教的真理

ワッハは宗教体験から知的、行為的、社会的表現が生じると論じた。ワッハの説明は創唱者やその弟子の宗教体験から諸形態が成立する過程には妥当するが、宗教共同体や儀礼は個人の宗教体験からその都度形成されるのではなく、個人の宗教体験に先立って存在する事実を必ずしも説明しない。儀礼の定型化や制度化(表現形態)は原初の宗教体験への遡及を可能にする通路として作用する。理論的には、宗教は体験から始まるが、実際には無自覚な儀礼への参加や日常の言語や価値観の習得を通して、宗教の素朴な知を習得する。古代宗教では教義より儀礼を重視するが、世界宗教では素朴な知を聖典や教義の理解を通じて主体的な宗教体験と理解に高めるメカニズム(宗教教育)を備えている。イスラームのシャリーアはその一例として巧みな方法である。

教義が個人の信仰を重視し、出家を要請するものであっても、人々に布教され、創唱宗教は信仰者の共同体ができて初めて成立する。古代・民族宗教の成立過程は不明で、すでに存続する段階にある。宗教は他者へ布教する情熱や行動を伴う。新しい宗教の真理(神や来世)は非合理で容易に信じられない。その真理性はそれを承認する信仰共同体によって保証される。非合理的な宗教的真理の承認は練達者の体験だけではなく、宗教共同体によって保証される。また、その知が子供にも教えられ、このことは宗教的真理が人間の生にとって非常に根源的であるこ

とを示唆する。素朴な知は洗練された教義や思索とは無縁だが、あたかもワクチンのように人生の悲惨を受容する免疫として作用してきたと言える。

近代以後、世俗化や宗教離れが指摘され、世界各地の宗教共同体も産業、生産様式の変化に伴い、家族や地域共同体も変容し、経済や医学の発展により人々は飢餓など生命の危機に鈍感になった。宗教の素朴な知にも危機がないとは言えないが、なお多くの宗教が現在まで存続している。素朴な宗教知は洗練された宗教思想や宗教体験と矛盾するようだが、それを準備する基盤でもある。現代の宗教を考えるためにも、素朴な宗教性の哲学的考察が必要である。

祈りにおける「かたどりと「ちから」

——レーウの宗教論から——

木村 敏 明

祈りを具体的なコンテキストに埋め込まれた社会的実践として考察した場合、そのような祈りを構成するさまざまなレベルでの「かた」あるいは「かたち」が果たす役割を考慮する必要がある。つまり祈りを身につけるといことは語彙やリズムを含めたこのような「かた」を適切に用い、それを駆使して日常生活における諸経験、苦しみ悩みなどに「かたどりと」をしていくことではないか。もちろんこのことが祈りという現象のすべ

てを汲みつくすというわけではないが、社会的実践としての祈りを考察する有効な視点となりうるのではなからうか。

本発表では、祈りにおける「かたち」、あるいは「かたどりと」としての祈りについて考察する糸口として、オランダの宗教現象学者、G・ファン・デル・レーウの宗教論をとりあげる。レーウは、従来オットーやハイラーのドイツ宗教学の流れの中におかれ「宗教経験」派の一人という扱いをされてきた。確かに、レーウが宗教の本質を「ちから」の経験にみていたことは疑問の余地がない。しかし一般に理解されているのとは少し異なっており、彼は宗教における「かたち」の問題に終世こだわった。『道と境界』（一九三二年）に代表される彼の芸術論は、芸術と宗教の関係を論じたものであるが、それはまさに「経験」と「かたち」の関係を軸とするものである。一年後に出版された『宗教現象学』（一九三三年）が「経験」に軸足をおいた人類の宗教史の試みであったとすれば、『道と境界』は「かたち」に軸足を置いた同様の試みであるといってもよいだろう。

ハイラーの祈り論において形式性の問題がもたらした内的な経験あるいは感情を硬直させる「化石化、機械化」を招くものとしてネガティブに、せいぜい必要悪としてとらえられているのに対し、レーウは祈りの持つ違った側面に光をあてる。レーウに言わせれば、祈りが生き生きした「ちから」をもつのは、それが固定され、反復される「聖なる言葉」という側面を保持しているからだという。その意味でレーウは祈りの形式性を墮落や必要悪ではなく、祈りにとって本質的な要素であると見るのである。このような「かたち」と「経験」の関係は祈り論だ